

特103

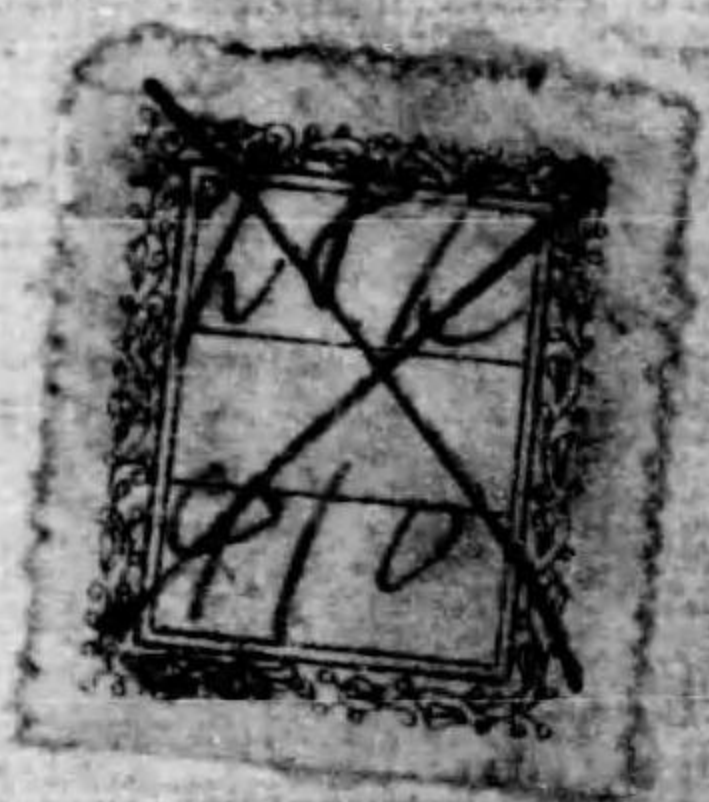
377

天地
改造

二瓶才次著

真正天文新地平說

全



始



特103
377



自序

抑も天地間に基布羅列せる羅森萬象を觀察すれば大は邈々
たる大空より小は肉眼を以て認むる能はざる細菌に至る迄
循環一軌にして變換なく始終期ありて紊るなし太陽の出沒
月の滿盈衆星の軌道を逸せる運行する作用の者にして歳々
變りなく夫れ此現象なる者は空劫以前威音以後幾億萬年に
涉りて變道あらざる者なり。

明治維新以來我國態一變し諸科の學說日に月に精妙の域に
進むも雖も獨り天文地文の學說に至りては考證薄弱にして
謬説を教化するに至る是を以て予一般人類の理想教たる天



神の眞意義を正悟し同時に此一大謬説を改正せんことを志し専ら天神に信賴し身命を神に捧げ時は明治拾九年四月廿日の祈念日其後貳拾參年正月貳日に顯著なる神徳を受け給ふ即ち天に太陽月の循環する無形なる輪綱圓の軌道ある事を發見し遂に太陽及び月の運行作用の原理を研究致せし者なり其より益々誠心誠意日夜天體地文研究すること茲に參拾餘年全く地平説の學理を證明することを得たり依て茲に其論旨の一端を發表す庶幾は我大和神裔たる臣民日本君國の正教に遵守し異教を革新すること共に眞正なる地平説に賛同あらんことを。

大正拾年一月

著者識

目次

第一章	太陽循環説	一
第二章	太陰循環説	四
第三章	日蝕及月蝕の説	四
第四章	地平不動説	五
第五章	天休星辰循環説	八
第六章	地平體の眞論説	九
第七章	引 力 説	二
第八章	南極探檢説	三
第九章	地平説總論	七

第十章 教學の根本……………三

附圖 輪網圖軌道及び世界大地不動略圖

第壹章 太陽循環説

地球論者は此世界の形狀は毬の如く又は橙の如くにして地球と稱す而して此地球は太陽の周圍を西より東に向て晝夜一回自轉しつゝ一ヶ年にして太陽の周圍を一週すると説けり。

該説は第一謬説なりと認む其理由は彼の北極星は天體の中眞最高に位置に在りて動かざる者なれば永久に於て位置の變動更に無き者なり地球は果して太陽の周圍を廻轉し太陽不動なりとせば太陽も北極星の如く永久に位置の變動無く一定の場所に存在すべき理なるに太陽に在ては不然日々廻轉して其位置を定まらざるは如何又地球が太陽の周圍を廻轉する者なれば其月に依りて北極星と

の距離に於て大差を生ずる理なり即ち一ヶ年中に於て太陽の南位に地球廻轉する時は北極星は太陽に遮られて之を見る事能はざる事二ヶ月半に及ぶものなり然るに事實は之に反し一ヶ年中何月にも又何地にても北極星の位置は些の變更もなく常に之を眺望するを得依之觀之も北極星と大地は常に一定不動にして彼の地動説の虚妄なるを證するに足るべし。

尙地球が太陽の北位に在りし時は北極星に向ふものなりと雖も太陽の南位に来る時は北位は變じて太陽に向ひ一ヶ年間に於て三ヶ月間は南北の變化を生ずべき理なるに世界萬國幾萬年に涉るも南北の變更之なきは北極星と大地は常に一定不動の位置にあるを以てなり。

尙又太陽は一定不動の位置に在りとせば太陽と北極星との距離方位明かに定まるべき者なり然るに少しも之を定む事能はざる所以は全く太陽は輪網圓軌道を無休に廻轉するが爲なり。

茲に我研究せる眞説を擧げん太陽は北極星を中眞として大空の高天を晝夜無休に循環する者なり其循環する所に無形なる羅連輪網圓の軌道三百六拾五線あり太陽は此軌道を東より西へと平面に一晝夜一線を循環す而して三百六拾五線を一週する期間を以て一ヶ年となす其輪網圓とは北極星の周圍を循環する軌道に命名せしものにして其形狀は附圖に示すが如く網の目に類似せし者なれども或時は北極星に半面は近く半面は遠く此遠近の差あるを以て晝夜の長短四季寒暑の往來等を來す者なり。

第貳章 太陰循廻説

月は太陽軌道直下に疎漏なる無形の輪網圓軌道あり此軌道を日夜東より西へ太陽と相對し太陽參拾回廻轉する内に月は廿九回す即ち廿九軌道線有り新月半月の理は太陽と月と廻轉する際に前後となり値ふ所蔭となるに依り變形狀を成す者なり。

第參章 日蝕及び月蝕の説

日蝕の次第は陰曆朔二日に定り上天は太陽の廻轉軌道にして其太陽軌道の下に相對したる月軌道を廻る場合月直下に値ふて太陽を蔭す故に成す者なり太陽月回轉は壹千四百拾六時間毎に回廻す

れども眞直上下になりし際或國は數時間暗蝕を來す者なり。

又月蝕の次第は太陽と太陰廻轉する節に或る距離を隔て、壹千四百拾六時間毎に正面に眞向したる際に値ふて月蝕を成す者なり

第四章 地平不動説

今を去る三百九拾五年即ち西曆一千五百拾九年夫の西班牙の探檢家「マセラン」氏の第貳の旗艦たる「ウィクトリア」號が當時専ら西方に向て太西洋を西に横斷し順次太平印度の兩大洋を通過し遂に再び太西洋に出で更に日出の方位たる東方より本國西班牙に歸着せるを以て世人は此航海を速斷して斯は地球を一週したる證據とせり尙海上に於ける船舶が沖へくと進行するに従て船形を見

失ふを以て大地を球狀と断定し世界舉りて之を信ずるに至れり是亦謬説なりとす如何となれば大地は平面にして不動其中眞は北極星の直下に當れる大地北極之なり此中眞たる北極を遠く離るゝ外邊無量無邊の地を南極とす而して東西の方位は北極の指定に依り各國各々其方位を假定せる者なり故に「マセラ」氏の「ウイクトリア」號が西班牙を解攬し磁針の示す處に依り西へ西へと航海を續けしと雖も北極は動かずして磁針は常に北極を指しつゝ北極の週圍を一週する者なり終に北極の週圍を西へ西へと平面に一週して元の位置に歸り來れる者なり西班牙より見れば日出の方位則ち東方より歸り來ると雖も艦上より見る時は出發當時と同じく西方を指して異なる事なし之れ東西の方位は定位なく其地方に依り假定

せる者なればなり。

次に地球論者が海上船舶の沖へ沖へと進行するに従て船形蔭るゝを見て地球説唯一の引證となすに至ると雖も幼稚なる觀測とす船艦の進むに従て船形を失ふ所以は海面に波浪あるを以て之に遮られて自然に見失ふに至る者なり譬へば平地にて七尺の高き塀を作り其外方に三十尺の竹を立て塀内四五間離れて見る時は上部二十二三尺を見へ而して其竹を五十間先に立替る時は漸く數尺を見るのみ更に遠く竹を隔だらしむる時は遂に之を見失ふに至る如斯塀を海上の波浪に假定し竹を船艦の帆檣に假定すれば船形の隠れ見いざるは波浪に遮ぎらるゝ所以を知るべし。

尙新高山と富士山の如き高山も遠地に於て見難きは距離多く隔

八
たるを以てなり且つ高山と高山と相對する時は能く見ゆべき筈なるも中間に幾多の山脈起伏するありて之に遮られ僅かに其頂上を見るのみ更に遠く隔たしむる時は遂に其頂上をも見失ふに至る恰も海岸の高所にて沖遠く海上に在る船艦を見る時其海面に於ける波浪海濤は高山と高山と相對する時に於ける山脈の起伏と同一の理なり。

第五章 天體星辰循環説

天は高遠にして十方無量無邊の大空なり此大空に於て世人の羅針とする北極星は空天の中真にして最高に位座す其部近下外に七曜星と五體星は正面に真向して廻轉す、天體の一部、天の河は白

雲の居所にして實に最定する時は晴天晴夜の天則を成し其雲は常に降下し宇宙運行する性質の者なれば晝夜の期定をなく自由雲行を起發する者なり、五體星は船形に座して運轉するに先行には白龍星木星水星亦後面に三鏡大白星部近に朱星子合星龜星等在り、又七曜星破運の東南に晨星光輝星座を定め廻轉す萬星は日月輪網圓軌道内外上下の星座を究め循環するものなり。

第六章 地平體の眞論説

天空に在りては北極星を以て中真となし大地に在りては北極星の直下の地を北極と定太陽太陰及び幾多の星辰は北極星の週圍を運行す而して太陽と北極星との距離日々遠近の差を生ずる所以は

太陽が輪圓軌道運行の作用に依るものなり而して太陽は大地に光熱を與ふる者なりと雖も其軌道外の遠き地には光熱及ばざるものなり則ち極南の地極北の地は常に氷結累々として山を作從つて人類の棲息に適わざるものなり若北極の地に於て太陽の出沒を望み得る者とせば我内地の夏季に於ては太陽北極の線に向ひし時北極の地は其反面夜間僅少續を見るべし又我内地の冬季に於ては太陽南極の線に向ひたるを以て極北の反面は晝間僅少續を見るべし是等の理由は太陽の輪圓軌道を運行する作用により生ずる結果なり、以上太陽の運行循環する所以を以て晝夜の長短四季の變化を生ずるに至る即ち予は天動運行の原理を發見すると同時に地靜地平體を究たるなり而して地平と云ふ地球と云ふ或學說の批評は

唯現在の論旨に非ず西曆紀元前に於てヘブライ人は土地は扁平なるを説き紀元前五世紀の頃夫の有名なる歴史家ヘロドダースは土地は扁平に有らざるを説降て紀元後六世紀の頃羅馬帝國のコスマスは地は扁平にして長方形なるものを説けり爾來是等久しく地平地球の論說確固たる保證發見せられざりし然るに英國のニウトン氏地の引力說發見證明せられ此大地も太陽の引力作用により公轉する引力說に基き遂に地球學說を一般信用するに至れり。

第七章 引力 說

引力說も亦謬見なる者と斷ずニウトン氏が林檎の落下せしを見て大地に引力在を發見して延て此地球も太陽の引力によりて公轉

すると定めたと雖も林檎の落下せしは地の引力に非ずして林檎成熟の季節に至り水分は降り生力を失ひ枝上に實を保つ事能はずして地に落る者なり又空氣より輕き者は登り重き者は降る自然の理に外ならず又草木には其性によりて早熟と晩熟との差あり其實熟する時は其軸生力を失ひ些少の風力にも落下するに至る者なり若大地に引力あるとせば樹木の枯葉等直ちに落下すべき者なるに中途の下枝に蜘蛛の巢ありて枯葉之に付着し數日を経て一陳の風吹き來りて枯葉も蜘蛛の巢も共に吹飛ばさるゝに至る是風は大小自由の勢力を有するも大地は些の引力更になき者と認むる次第なり。

又風在日に鳥の翔るを見るに鳥の兩羽は能く風の抵抗を支い空

中自由自在に飛行す此間に當り風の抵抗力に加ふるに引力なる者は鳥の進行運動を妨げず些かも靜止の現象を示さざる者は引力と風の抵抗力の微弱なるが爲なり若し風力の大なる時は如何に飛行に巧妙なると雖も中途に其進行を妨害せらるゝ事當然の理法なり茲を以て引力の無微にして風力の強大なるを確知得るなり。

第八章 南極探檢

南極とは世界の外邊無量無限の地を云ふ而して太陽は一定の軌道輪網圓に依りて運行する者なれば其輪網圓以外の極地に至る時は光熱少なく一會遠く離るゝ時は光熱無き故に世界萬國の南極々地は大陸無限に連接すると雖も外邊無量の巖石氷雪を以て大海を

圍み其氷山積雪を過て極南に進まんとするも此地には太陽の光熱なく朦々たる雲霧は天體を蔽ひ全く暗黒界にして何一つの生物をも見る事能はず遂に徒勞に歸するものなり。

近年南極探檢を計畫せしは英國のスコット氏を始として諾威のアムントセン氏又英國のシヤクルトン氏、我國の白瀬中尉等なり而して此等の人々は何れも其極地を完全に探檢せし者なく中途にして臥れ或は積雪氷山に遮られて空く歸り或は故意に虚偽の報書をなして賣名に汲々たるもの等にて殆んど信を置くに定らず是皆太陽運行の季節を知らざりし結果勞して功を見ざる者なり。

夫大地平面にして北極を中眞とする者なれば北極に向つて探檢或は成功する事あらんも南極は之に反し其領域廣大無邊且つ太陽

の光熱なきを以て完全に之を探檢せんとするも到底望み難き業なりとす。

然れども太陽の輪網圓軌道を循環する時期を知り其方向に向つて進む時は前掲數氏の探檢に比してより以上安全に又精密に功を奏する事を得べし依て南極探檢家の爲に南極探檢の好期を擧示す。

十一月十二月一月は太陽は亞弗利加印度南洋の上天輪網圓軌道を廻り二月三月四月は澳斯土刺利亞の上天に赴き五月六月七月には南米南位の上天を運行し八月九月十月には愛爾蘭西天より葡萄牙南天に陟り廻轉す如斯太陽輪網圓の軌道を廻りに従て四季の寒暑を生ずる者なり。

一月は印度南極大陸を連絡せしウツクストラントに達するを得。
 二月はソマトラシヤハ島の南位「マリフリー」「アムーテルタム」
 ケルカレンラント諸島の南極に行く事を得
 三月は澳斯土刺利亞の南極ビクトリアの大陸の連地に進む事を得べし。

四月は「チャザム」「カムベル」ハレン諸島の南極大陸に行を得。

五月はコリンロイス諸島の南極に達するを得べし。

六月七月は南米南極東地シセツツラントに上陸するを得。

八月九月はジョルジャよりケイ灣冬榮に南進するを得る。

十月は英國葡萄牙より南進する時に至る。

十一月十二月はアフリカ南位のケモ大陸に達する事を得。

右の季節に右の地點に南進する時は従前の南極探檢に比して困難遭遇する事少し且つ餘程奥深く探檢するを得べし然りと雖も世界の外邊は無量無邊の南極にして日月の光りもなく雲霧濛々たる極寒なれば太陽を無視して盲進する時は凍死して再び歸來するを得ざる者なり。

第九章 地平說總論

前章に於て既に地球廻轉說の誤謬なるを説き吾地平不動說は萬代不易の眞理たる所以を論述したるも更に地平說の確固不拔たるを證せんがため尙其一般を略述す。

一 世界の根本北極星は天の大空中眞の最高位に安座する者に

して日月星辰は其外邊に於て上下の距離を隔て、灣形の軌道存在し以て循環する者なり然れども吾人肉眼は假令如何程精密なる望遠鏡の力を藉りるも決して之眞髓を見る事不能只一心の感應靈通を以て此軌道觀る事を得る者なり予は參拾餘年來天地神明に誓ひ不惜身命の精力を以て前人未發の大眞理を發見するに至れり。

二 十巖三水一地世界成立の根本を觀る時は岩水地の三より成れる者にして其比例は十岩三水一地の割合とす十岩とは深底無量無限の奥を極めず重力廣大の盤上に體立し大海陸地山岳を載せて動かざる物體自然に備り在を云ふなり三水とは陸地の外方大海湖沼河川雲霧及び陸地動植物等に含有する水量は世界成立の三分在云ふなり一土とは世界の寶物たる土地は只僅かにして本元世界成

立の一分を有するに過ぎざるを云ふなり。

三 世界地平說今大地を球狀として北極を上、南極を下にして廻轉するとせば南極端の群島は一時間も保たず海水に沈濫せらるゝに至る者なり然るに開闢の昔より今日に至る迄かゝる地變を生ぜし事なく大平洋の南端に「チャザム」「カムベル」「エメラルト」の如き小島にも家屋造り住居する事を得るは是地球に非ずして地平の賜なりとす而して世界の外邊は前にも述たる如き積雪氷山の大陸連接して無限の大海を圍む大海は平坦にして其表面は常に動搖して波浪ありこの波浪起伏する處より航海の船舶を見失ひ遂に地球の謬見に陥るものなり尙無限なる大海を圓形なる大地と共に廻轉するとせば必ず海水は汎濫する理なるに氷袋の中の海原に非ざ

るを如何に引力の作用とは云い海水更に汎濫なきはこれ全く地平たるを以てなり。

世界不動説地球論者は大地の南北を地軸として東に廻轉する者とす果して然らば高天の雲行如何を觀察せよ大地東に廻轉せば雲は絶ず西行すべき理なるに事實は之に反して通常西より東に運行するに至る。

又世界の大川流を調査するに北米のメシシッピー川南米のアマゾン川支那の揚子江黄河の如き路西亞のウオル川阿弗利加のナイル川何れも東流するを以て太地東に向つて廻轉する場合晝は東を下にして流るゝと雖も夜に至れば西部則ち上流に向つて逆流すべきなり然れども千秋萬古此等大川の逆流在りしを聞かず之大地不

動の一證なり。

更に樹木の成長繁茂を見るに大地一分間に廿里餘の急速力を以て東に廻轉する者とせば如何成る樹木も三四十間成長繁茂は得難きものなり且つ地皮の西に傾き樹木直立し難く尙東に靡く事なきは理の當然なり然るに事實是に反して東に靡くを見る之亦大地不動の一證。

又果して大地廻轉するとせば我身體を動かずしてある標準を北極星と直線に立向ひ之を眺望する時は我身も大地廻轉に従つて自然に廻轉するを以て夜半に北極星に横向となり曉天には背向きと變化すべきものなるに夕より朝に至るまで最初の位置少も變更する事なしこれ亦大地不動の一例なり。

更に一例を擧げん大地果して東に向つて廻轉する者とせば今茲に飛行機在り之に乗じて支那滿洲奉天等西方に向つて飛行せんとす大地不絶自轉するとせば土耳其黒海獨逸英國等西洋諸國が其到着時刻を待たずして飛行機の下に自ら來るべきは必然の結果たるに係らず實地は決して然らず定めたる飛行時間に於て規律正き目的地たる支那滿洲奉天等に達する者なり依之觀之も大地は更に廻轉すべきものにあらずして無始の始より無終の終りまで全く不動安定なる事正に明なり然るに地動説の學者は日月星辰の運行如何を究めず此重大無限の世界を以て一の機械的輕質なる者と誤解し太陽の周圍を一週するに參百六十五回自轉して一年となす者とせり噫如斯誤謬架空説を稱導して得々とし世人も亦之に賛同して眞

實視するが如は實に慨嘆に堪ざる者なり。

第十章 教學の根本

人源の生來靈命靜座瞑目至心を以て天に伺ひ考ふる時に吾人々類に高下貴賤の差別を生ずる所以は皆是星辰の作用に起因する者なり印度宿曜説支那の幹枝九星説其他東西古今の宿命説は皆これ一端を闡明せる者に外ならず上大光輝星は萬星を主宰し此星氣の靈通する時は皇帝と成り光薄小星は上大輝星に従ふものにして此星氣の靈通する處は萬民となるものなり又人性に賢愚強弱あるは皆天の高星中星小星の三種より生來するものにして即高星の靈通する時は聖賢君子を生じ中星の靈する時は英雄豪傑を生じ小星の

靈通する時は普通人士を生ず故に吾人の身體は他の生物と均しく大地の生氣を受けたると雖も獨り其靈命は天の星辰靈氣に通ずるものなるを以て常に日月星辰に對し尊崇の觀念を惹起して謝恩禮拜せざるべからず殊に日月は晝夜間斷なく運行して天下の生物に慈愛を垂れ給ふ者なれば世界萬有の主宰神として尊信すべきなり、然る時は必ず天の加護ありて幸福吉慶を稟け又之に反し人欲の儘行ふ時は必ず天の咎責に遭ひ災害凶禍續出する者なり。

尙特に注意すべきは支那古聖戒められたる惡を爲せば天の網に罹ると云ふ事あり天網とは如何なるものなるや今日迄不明なりしも我輪網圓軌道發見に依りて具體的に説明するを得たり則ち天網とは輪網圓にして小人惡を爲して知る者なしと思ふとも上天には

日月の運行する軌道輪網圓あるを以て如何なる者も此網の外に脱出する事あたはず終に輪網圓に罹りて其罪狀明了となり懲罰せらるゝに至る之を天網にかゝると云ふなり。

北斗元靈經曰く眞者神也正也直也化也聖也靈通而妙明謂之眞神也と若し夫れ天地間の道理を認めざる時は各宗教の教理信條は根柢より破壊せられ吾人は何所にか安心立命の地を求めんか左すれば吾人々類は形質を大地の生氣を稟け靈魂は天の星辰より受けたると確信し身を終め家を齊い心を正して天の靈命に通ぜん事を勉めざるべからず然り而して人道の根源を日月星辰運行の眞理より解説し以て人生の行程を圓滿平坦ならしむるは實に吾地平説を措て他にあらざるなり。

以上論述せし如く天の使命を帯びて宇宙の大憲を究大地の外界
八方を悟り數年來苦心研究の結果茲に發表する次第今や世界は改
造の機運に到來せる今日余が研究の解決は日本皇國の國威を海外
に輝し大和人種の智力を世界史上に記録するの秋我國未曾有の最
大偉業なれば我忠君愛國なる各位の御同情を仰ぎ邦家の爲め真正
なる新地平説研究に御賛同御助力給わらんにと希望に堪へざる
なり

高學者地球の誤説此書見な

月日のめぐり眞實地うごかず

日月の廻り究めし山人が

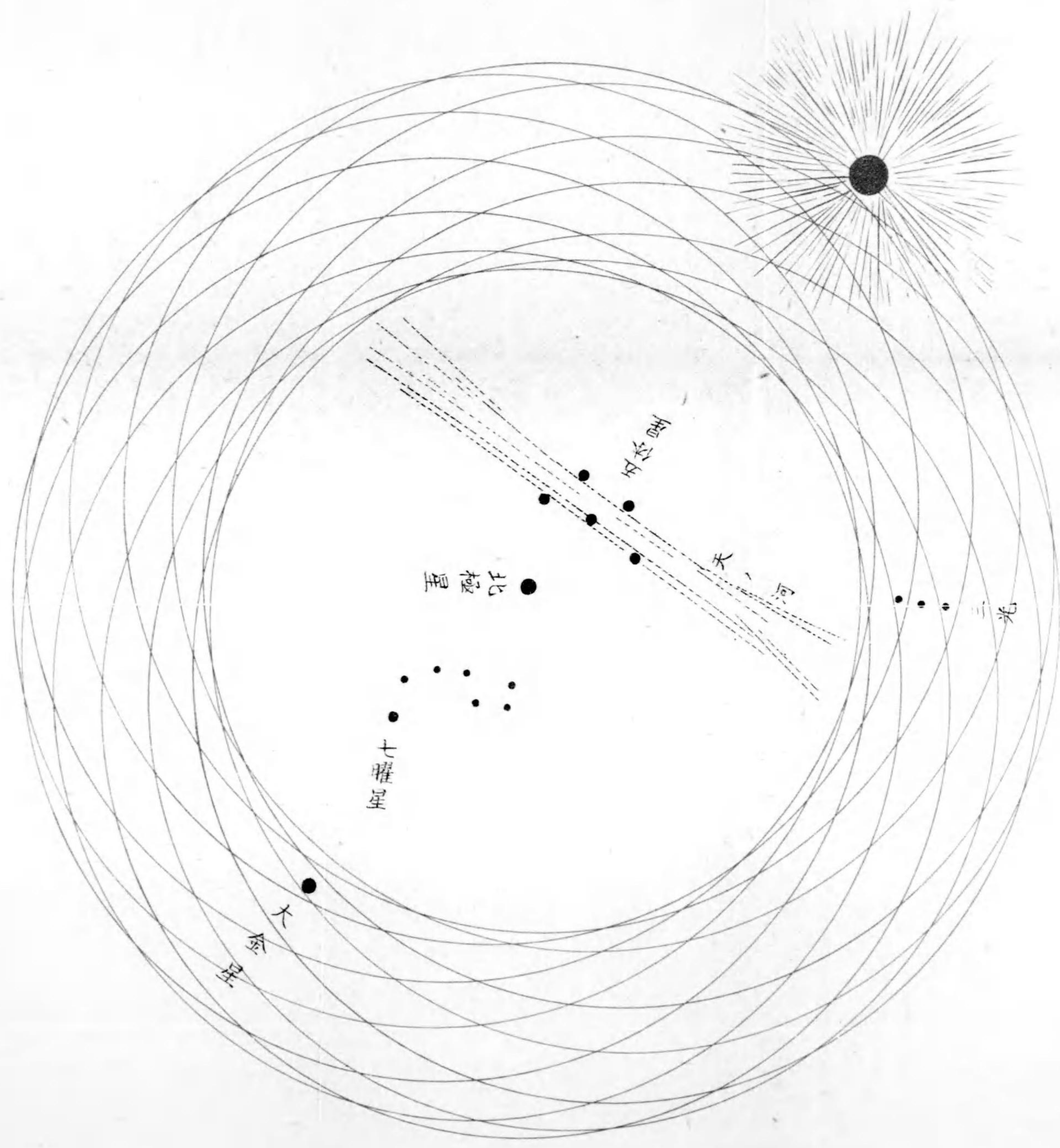
大地不動のけんを世にふる



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side or very light ink.

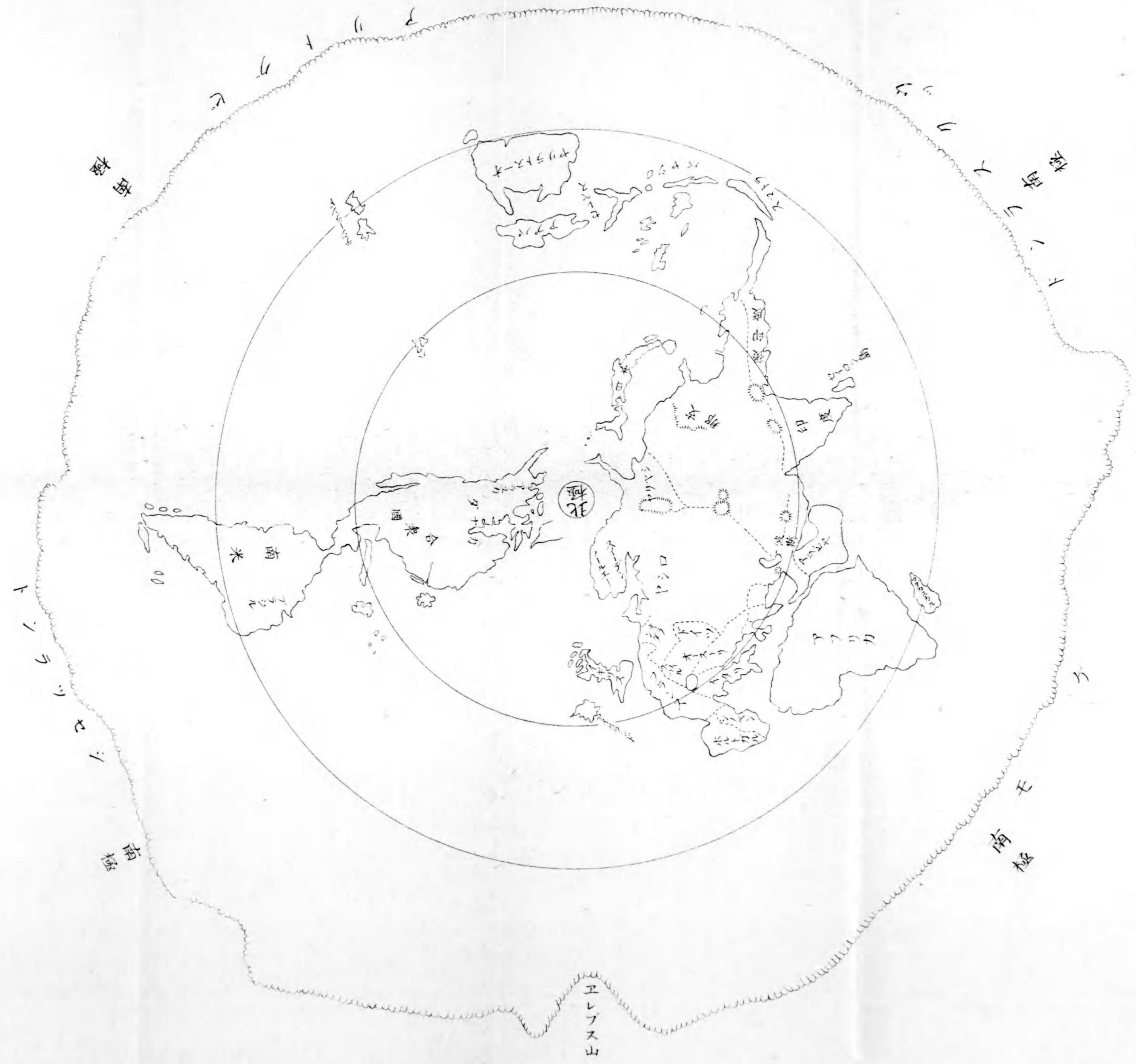
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

大空輪網圓軌道畧圖



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

世界大地不動畧圖



181
4/0

大正十年一月二十五日印刷
大正十年三月十日發行

著作
權
所有

著
者

二
瓶
才
次

福島縣大沼郡西方
參千六百貳拾八番地

發
行
者

田
京
文
喜

東京市淺草區田原町一丁目拾八番地

印
刷
者

福
山
福
太
郎

東京市牛込區西五軒町五十二番地

終

